

靈樞 四時氣 第十九(後半)

二月

腹中常鳴、氣上衝胸。喘不能久立、邪在大腸、刺盲之原、巨虛上廉三里。小腹控睪、引腰脊上衝心、邪在小腸者。連睪系屬干脊、貫肝肺、絡心系。氣盛則厥逆、上衝腸胃燠肝、散于盲、結于臍。故取之盲原以散之、刺太陰以予之、取厥陰以下之、取巨虛下廉以去之、按其所過之經以調之。

善嘔、嘔有苦、長太息、心中憺憺、恐人將捕之、邪在膽。逆在胃、膽液泄、則口苦。胃氣逆則嘔苦、故曰嘔膽、取三里以下。胃氣逆、則刺少陽血絡、以閉膽逆、卻調其虛實、以去其邪。

飲食不下、膈塞不通、邪在胃脘。在上脘則刺抑而下之、在下脘則散而去之。小腹痛腫、不得小便、邪在三焦約。取之太陽大絡。視其絡脈、與厥陰小絡。結而血者、腫上及胃脘、取三里。觀其色、察其以(太素目)、知其散復者。視其目色、以知病之存亡也。一其形、聽其動靜者、持氣口人迎、以視其脈。堅且盛且滑者病日進、脈軟者病將下。諸經實者、病三日已。氣口候陰、人迎候陽也。

〈大腸病〉

腹中、常に鳴るは、氣、上りて胸を衝くなり。喘ぎて久しく立つ能はざるは、邪、大腸に在り、盲の原※、巨虛上廉の三里を刺す。

※盲の原 九鍼十二原「盲之原、出於腓腓(へそ)、即任脈之下氣海也」

太素 盲作賁。「賁、膈也。膈之原、出鳩尾也」

甲乙「腸中常鳴時、上衝心、灸臍中。腹脹腸鳴、氣上衝胸、不能久立、天樞主之。大腸有熱、腸鳴腹滿、俠臍痛、食不化、喘不能久立、巨虛上廉主之」
邪氣藏府病形「大腸病者、腸中切痛而鳴濯濯」「當臍而痛、不能久立、與胃同候、取巨虛上廉」

〈小腸病〉

小腹、畢を控き、腰脊を引き、上つて心を衝くは、邪、小腸に在ればなり。畢に連なり脊に系屬し、肝肺を貫き、心系を絡ふなり。氣、盛んなれば、則ち厥逆して、上のかた腸胃を衝き、肝を燠し、盲に散り、臍に結ぶる。

故に之を盲の原に取り、以て散らす。太陰を刺して之に予(あづか)治療とし(り)※、厥陰を取りて之を下す。巨虛下廉を取りて之を去り、其の過ぐる所の經を按じて之を調ふなり。

邪氣藏府病形「小腸病、小腹痛、腰脊控牽而痛」

※張介賓「刺太陰以予(〓與)之、補肺經之虛也。取厥陰以下之、寫肝經之實也」
張氏は「予」を「与える」の意に取っている。

〈胆病〉

善々嘔き、嘔きて苦み有り、長く太息し、心中、懨懨(タン、うれふ)として、人の將に之を捕へんとすと恐るる者は、邪、膽に在り。逆、胃に在りて、膽液、泄れば、則ち口、苦し。胃氣、逆せば、則ち苦みを嘔く。故に嘔膽と曰ひ、三里を取りて下す。胃氣、逆すれば、則ち少陽の血絡を刺し、以て膽逆を閉ず。卻(ま)同じ行為が繰り返されることを表す)た、其の虚實を調へ、以て其の邪を去る。

邪氣藏府病形「膽病者、善太息、口苦、嘔宿汁、心下澹澹、恐（十如太素・甲乙・千金・脈經）人將捕之、噎中訥訥然、數唾」

〈胃脘病〉

飲食、下らず、膈塞して通じざるは、邪、胃脘に在り。上脘※に在れば、則ち刺して抑へて下す。下脘に在れば、則ち散らして去る。

※楊上善「邪在上管、刺胃之上口之穴、抑而下之。邪在下管、刺胃之下口之散穴而去之也」脘＝管

邪氣藏府病形「胃病者、腹脹、胃脘當心而痛、上肢兩脅、隔咽不通、食飲不下、取之三里也」

〈三焦病〉

小腹、痛みて腫れ、小便を得ざるは、邪、三焦の約（からまり）←不都合、やまいに在り。太陽大絡に取る。

邪氣藏府病形「三焦病者、腹氣滿、小腹尤堅、不得小便、窘急、溢則水留即爲脹、候在足太陽之外大絡、大絡在太陽少陽之間、亦見于脈、取委陽。膀胱病者、小腹偏腫而痛、以手按之、即欲小便而不得」

張志聰「此邪在膀胱而爲病也。三焦下俞、出於委陽、並太陽之正、入絡膀胱約下焦。實則閉癰、虛則遺溺、小腹腫痛、不得小便、邪在三焦約也」

其の絡脈と、厥陰の小絡を視、結ばれて血あり、腫れ上りて胃脘に及ぶは、三里を取る。

〈診察法〉

其の色を觀、其の以（太素 目）を察すれば、其の散復を知る。其の目の色を視て、以て病の存亡を知る也。其の形を一にし、其の動靜を聽く者は、氣口、人迎を持し、以て其の脈を視るべし※。堅にして且つ盛、且つ滑なるは、病、日々に進む。脈、軟なるは、病、將に下らんとす。

※九鍼十二原「觀其色、察其目、知其散復。一其形、聽其動靜、知其邪正。」

小鍼解「觀其色、察其目、知其散復、一其形〔※〕、聽其動靜者、言上工知相五色、于目有知、調尺寸小大緩急滑瀉、以言所病也」

馬蒔「一其形之肥瘦。曰一者、肥瘦各相等否。聽其身之動靜、凡身體病證語默皆是」
「一は、其の形の肥瘦なり。一にすと曰ふは、肥瘦は、各々相ひ等しく否なり。其の身の動靜を聽く(ゆるす)とは、凡そ身體の病證の語默(語ることと黙して語られないこと)、皆な是(これ)なり」

第一とすべきは、患者の身体の肥瘦である。それを第一にするのは、肥っているのも痩せているのも、各々等しく良くないからである。患者の身体の動靜を聽(ゆる)すとは、凡そ身体の病證の語ることと語られないこと、これら全てのことである。

・素問・鍼解篇では他をさし置いて見事な注を付していた馬元台が、ここではハズした注を付けている。こういうのを読むと面白い。

森素・鍼解案文「案、五色修明、謂目明。音聲能彰、謂耳聰也。修明、蓋謂目能修収五色之明。能彰謂耳能聽別音聲之彰也」

五色修明というのは、目が明らかなことで、音聲能彰というのは、耳が聰(さと)いことだ。修明というのは、蓋し目がよく五色(すなわち五藏の状態を表す色)が見分けられる明らかさのことで、能彰というのは、耳がよく五藏の状態を表す音聲を聽き別けられる彰らかさのことである。

諸經、實なる者は、病、三日にして已ゆ。氣口の候、陰なりて、人迎の候は陽なり。

楊上善「氣口、藏脈、故候陰也。人迎、府脈、故候陽也」

張介賓「氣口在手太陰肺脈也。氣口獨爲五藏主、故以候陰、人迎在頭陽明胃脈也。胃爲六府之大源、故以候陽」

壬子(嘉永5、1852、抽齋48歳)初冬廿八日以周日日校本一校了

〈大腸病〉

腹中が常に鳴るのは、氣が上って胸を衝いているのです。喘いで長く立ってられない者は、邪が大腸にあります。これは関元と、巨虚上廉の三里穴を刺します。

〈胆病〉

しばしば嘔(えづ)き、嘔くと苦味が口に上ってきて、長くため息を吐き、心中が鬱々として、人が自分を捕えに来るような恐れを抱いている者は、

邪が膽にあるのです。逆氣が胃にあつて、膽液が泄れるので、口に苦味を感じるのです。胃氣が逆したときには、苦味を嘔くようになります。これを嘔膽と言ひ、三里を刺して逆氣を下します。胃氣が逆した時は、少陽の血絡を刺して、膽逆を閉します。同時に（卻 同じ行為が繰り返されることを表す）、その虚實を調べて、その邪氣を去るようにします。

〈胃脘病〉

飲食が下らず、横隔膜のあたりが塞つて通じないのは、邪氣が胃脘にあります。胃の上方にあれば、鍼をして抑えて下します。下方にある場合は、散らして去ります。

〈三焦病〉

下腹が痛んで腫れ、小便が通じなくなった場合は、三焦の絡まりが邪を生じているのです。太陽經に血絡の大きなものを求めて寫血します。太陽經の絡脈と、厥陰經の小絡を見て、結ばれて血が溜まり、腫れ上つて胃に及んでいる場合は、三里に鍼をします。

〈診察法〉

その顔色を見、その目を診察すれば、病の予後が分ります。患者の目の色を視て、病の帰趨を知るのです。

術者は身体に神経を行き渡らせ、患者の脈の動静を知ろうとする場合、氣口と人迎に指先をしつかりと保持し、脈を診るべきである。脈が堅実で盛んであり、滑らかなのは、病が日増しに進んでいます。脈が軟らか

である場合は、病がこれから癒えようとしています。
諸経脈が実している場合は、病は三日経てば癒えます。その場合、気口脈を陰と見、人迎脈を陽と見ます。